

中部地区英語教育学会三重支部

英語教師がおさえておきたい
ことばの基礎的知識②
言語習得編

2022年12月18日 15:15-16:55

白畠知彦(静岡大学)
shirahata.tomohiko@shizuoka.ac.jp





今日のテーマ

母語獲得過程と
第二言語習得過程の
概略を知ろう

本日の内容

1. はじめに
2. 母語の獲得過程
3. 第二言語の習得概要
4. 最後に

母語獲得過程

- ・人間がどのように母語を獲得して行くのか
- ・外国語学習(第二言語習得)の特徴

第二言語習得

- ・第二言語の学び方(学習環境)はさまざま
- ・学習環境の相違⇒学習の速度や最終到達度に影響
- ・同じような習得の道筋(習得過程)をたどって第二言語は習得されていくはず



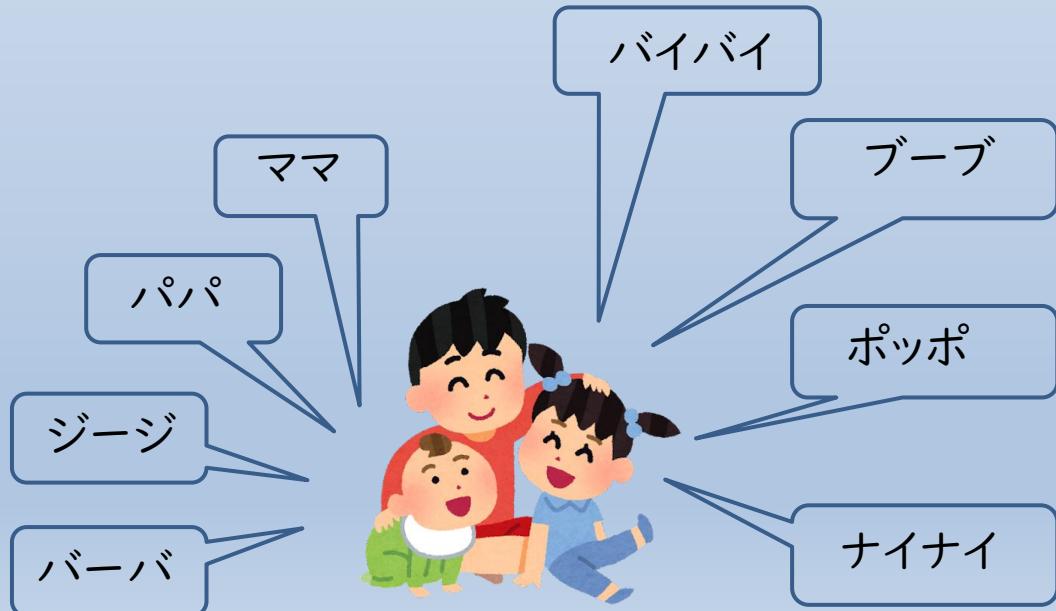
2. 母語の獲得過程

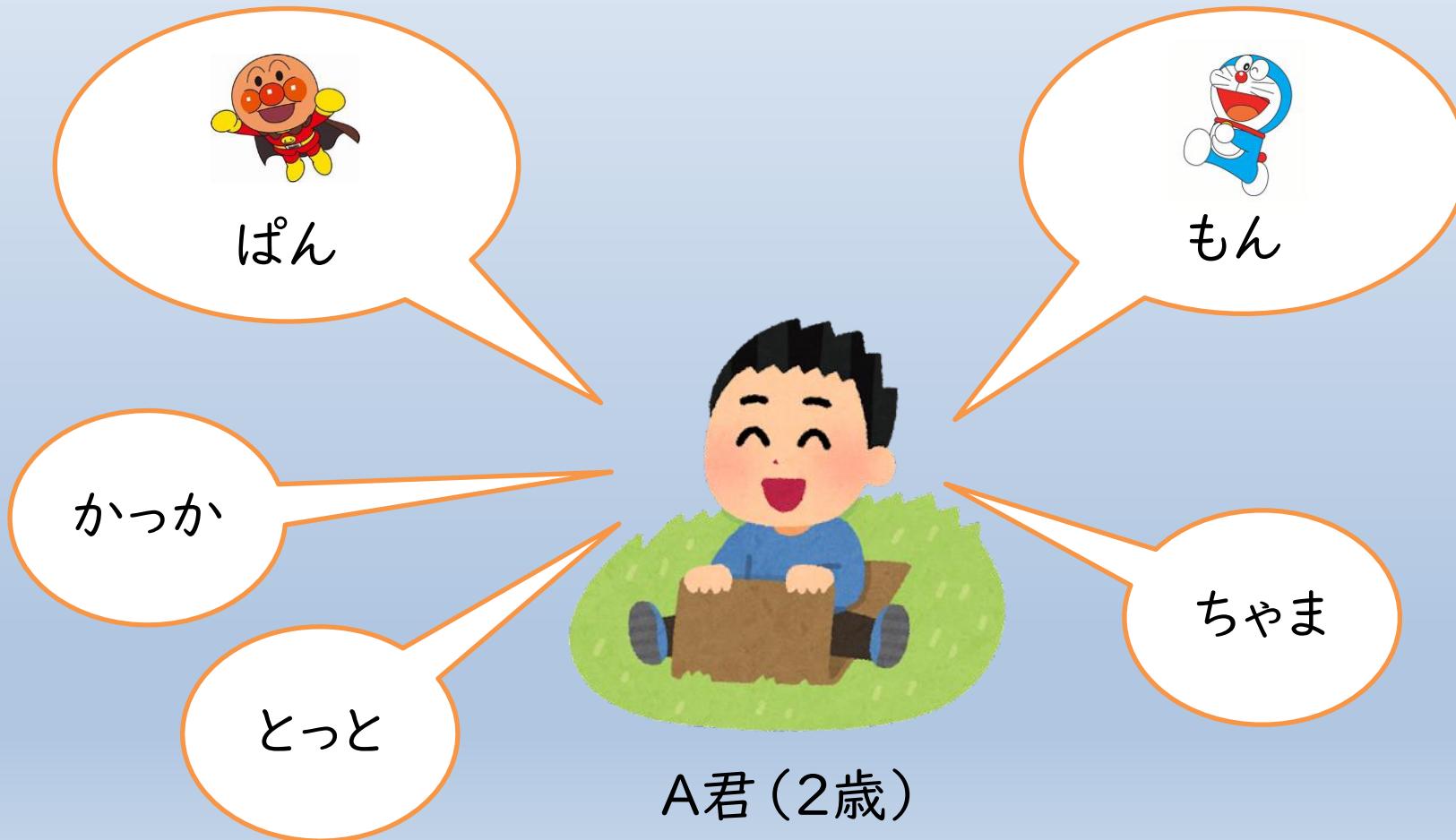


幼児は親の真似をして母語を獲得していくのか？

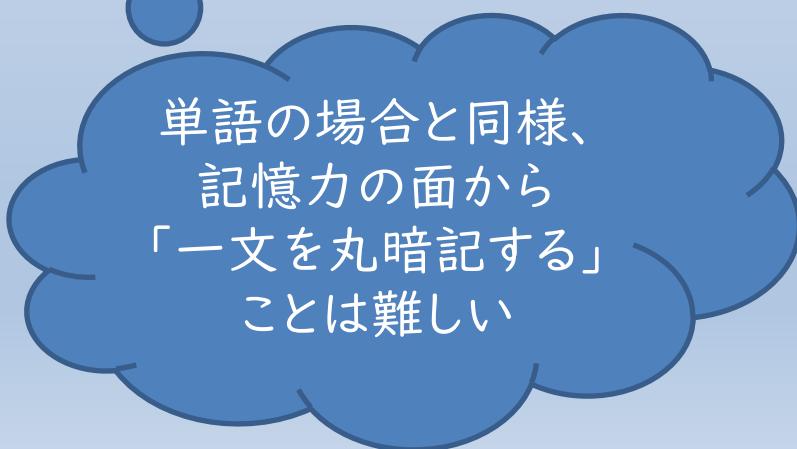
幼児は親の真似
をして母語を獲得
していくのか？

幼児は親の話すことばを
真似して必ずしも母語
(の文法)を覚えていく
わけではない





語彙獲得以上に、
母語での文法獲得では、
親のことばをそのまま真似し、
繰り返すことで覚えていく
わけではない



単語の場合と同様、
記憶力の面から
「一文を丸暗記する」
ことは難しい

【仮定】

幼児は親の真似をして母語の文法を
獲得していく

親は自分の大切な子どもに向かって、
文法的に誤った表現で話しかけるかどうか?
⇒可能性は大変低い

大人

- とても疲れている、眠たい、イライラしている
- ある話題について話をしている途中で、
自分の言わんとする考えが変わったり、
その話題を別の内容に変えたりして、
現在の表現方法を別の表現(構文)に変える
⇒文法の誤りをすることがある
⇒いつも100%文法的に正しく発話している
わけではない

基本的に、
親は
母語で許されている
文法規則に沿って
幼児に
話しかけている



- 幼児の受け取る**母語インプット**は、「あなたが獲得すべき言語ではこのような言い方をしますよ」という**肯定的な証拠**である
- 文法的に適切な言い方の**証拠**が親から示されている



幼児が親の真似をして母語（の文法）
を獲得して行くのであれば、
幼児の発話には、
文法的誤りがほとんどないはず

幼児の実際の発話を分析

↓

- 数多くの文法的な誤り
- 誤りの多くは、一度きりの誤った発話で終わるのではない
- 何か月にも渡って、中には1年以上もの間、継続的に起こり続ける誤りもある

典型的な誤りの一部

(1)

- a. しょうぼうしゃがみた (=消防車を見た)
- b. おっきいのワンワン (= 大きい犬)
- c. いすどいて (= 椅子どけて)
- d. ちいさいじゃない (= 小さくない)
- e. しまない (= 死なない)
- f. ちががでた (= 血が出た)

以上の考察より

- ・ 幼児は自分の獲得する言語（文法）を、親のことばをそのまま真似して覚えていくのではない
- ・ このような獲得の過程は、とても不思議な現象である
- ・ 母語獲得過程を研究している人々は、なぜこのようなことが起こるのかについての理論を構築しようとしている



2. 母語獲得では共通した発達過程や獲得順序があるのか？

- 子どもの育つ環境は皆それぞれに異なる。
- 生まれた場所も、家族構成も異なる。

⇒それぞれの幼児がさまざまに異なる順番で、母語のいろいろな文法項目を獲得して行くのだと思われても不思議ではない。

ところが

- どこで生まれようと、
 - どのような性格の人物が親であろうが
 - どんな環境で育とうが
- ⇒ほぼすべての子どもで、日本語を獲得して行く道筋や速さが類似している。

母語を獲得していく幼児



- みんなとでも類似した発達過程をたどって
自分の母語を獲得していく
- 生後、幼児がある年齢に達すると、
ある決まった言語獲得の発達段階を迎える
そして、ある決まった表現ができるようになる
- ある発達段階にしばらく留まっていた後、
次の発達段階に進んで行く



誕生	6か月	12か月	18か月	24か月	4-5歳
<hr/>					
クーリング期	哺語期	一語発話期	二語発話期	多語発話期	完成期

図1. 誕生から5歳くらいまでの母語の発達段階

2歳児、3歳児の発話では…

- 必要な文法形態素や機能語を脱落させたりして、まだ文法を間違えるときがある
- しかし、さまざまに間違いを犯しながらも、次第に大人の使う文法と同じようになっていく
- 小学校に入学する頃には、誰からも明示的に習うことがなくてもほぼ完ぺきな母語の文法体系を身につけている



圧倒的に大人と異なるところは…

幼児の語彙量

- ~24か月ぐらい: 約50語
- 2歳~6歳: 1日平均10語
- 6歳以降: 最高で1日20語獲得

※成人の平均的語彙量: 3万語~4万語

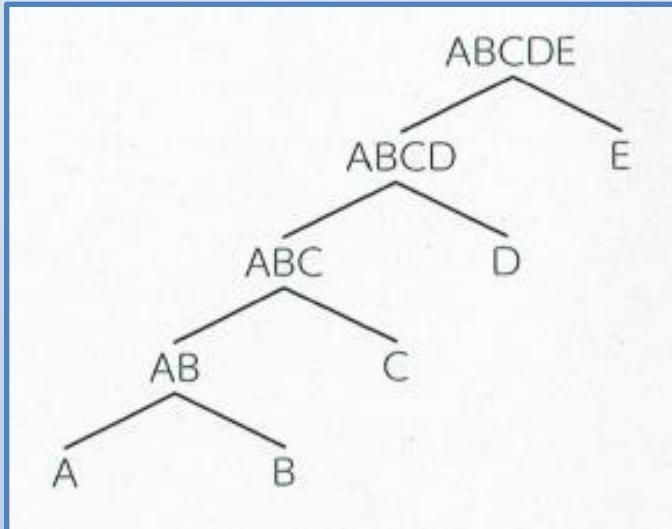
※5歳児の語彙量 ⇒ 成人に比べてまだ非常に少ない

新しい語彙は毎年生まれている

(例:パソコンやスマート関係の用語)

⇒ 語彙はある意味、生涯ずっと学習し続けることになると言っても差し支えない

(2)



- (3) a. 優子は [文 健が [文 浩がラーメンを食べた] と言った] と思った。
 b. Yuko thought (that) [Ken said (that) [Hiroshi ate ramen]].

(4) 文は永遠に長くなる例

これは太郎が食べたおにぎりを売っていたスーパーマーケットで働いている花子が通っている大学の物理学の教授がよく行く居酒屋の主人が大切に持っている西城秀樹のCDです。



- 語と語を結びつけてさらに大きな単位(句)を作っていく操作
=「併合(merge)」
 - 併合を繰り返すことで作られる構造=「階層的句構造」
- ▶ ヒトは、併合と、その繰り返しにより出来上がる
階層的句構造を身につけられたからこそ、
言語(つまり、思考)を飛躍的に発達させる
ことができた
- ▶ 単純な文構造では表現することが不可能
であった私たちの複雑な思考を、文を長くし
統語構造を複雑にすることができるようにな
ったことで、ことばによって概念化し、
表現することが可能になった



言語インプットと「生得的な言語獲得装置」という仮説

母語を獲得しようとしている幼児

「相応の量の言語インプット」は受けるが、

「すべての文脈・構文を網羅する完璧なインプット」ではない

親の発話

- 文が完結せず途中で終わってしまったりする場合
- 話の途中で文の構造が変わってしまう場合

⇒文は無限に存在する

⇒無限の文に対応できるほど完璧な母語インプット
を受ける幼児はない

幼児が受ける言語インプット

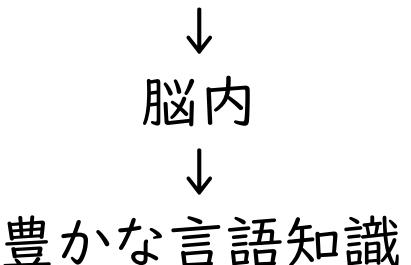
⇒質、量ともに十分なものではない

- ・ 不十分なインプットしか受けないこと
=刺激の貧困(*poverty of the stimulus*)
- ・ 刺激=耳から入って来る言語インプット

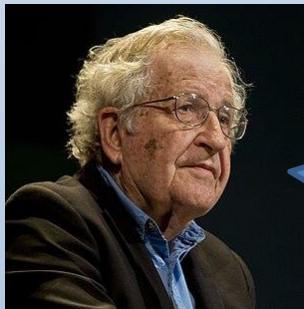
耳から入って来る言語インプットは、
幼児が覚えなければならぬ、
あらゆる言語文脈を網羅できるほど
には十分なものではない

- 不十分なインプットしか受けられない
にもかかわらず、幼児が獲得する
言語の中身は大変豊かなものとなる
- 小学校に入学する前には母語の
文法をほぼ獲得してしまっている

(6) 不十分な言語インプット



なぜ子どもはインプットから受ける言語情報以上の知識を持つようになるのだろうか？



それは、私たち人間には言語の獲得を手助けしてくれる言語獲得能力なるものを脳内に備えて生まれてくるからだ

Noam Chomsky

言語獲得能力

=Universal Grammar (UG)

=普遍文法

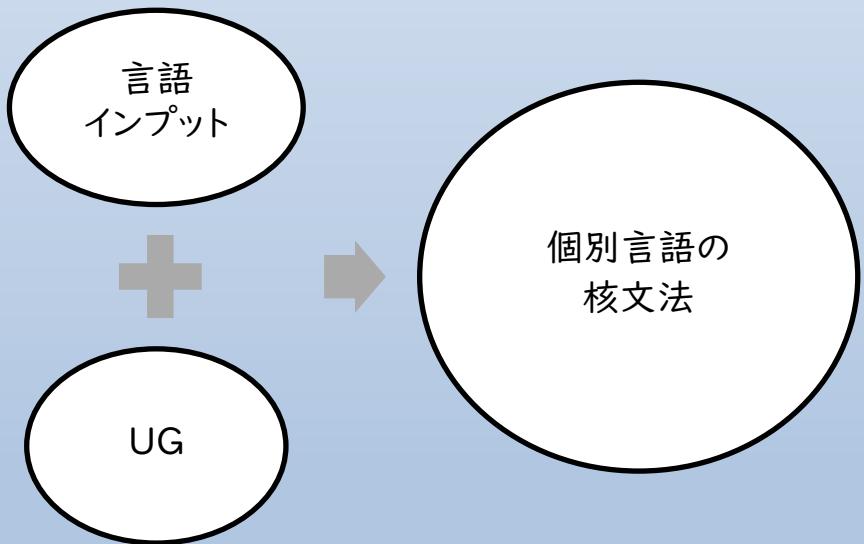


図3. 母語獲得におけるUGの関与モデル

母語での音声の獲得過程

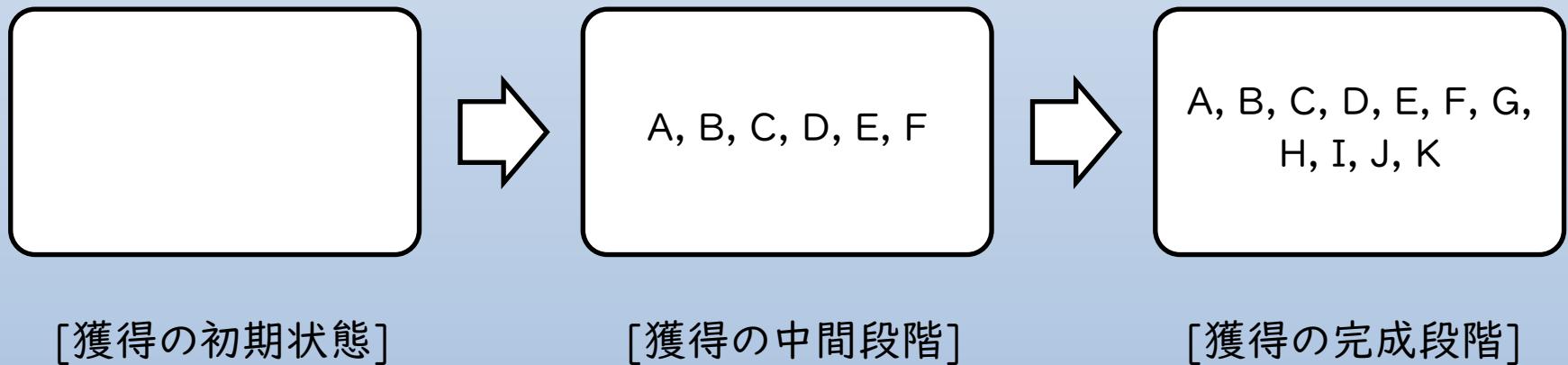


図5. 音の識別能力獲得仮説Ⅰ

母語での音声の獲得過程

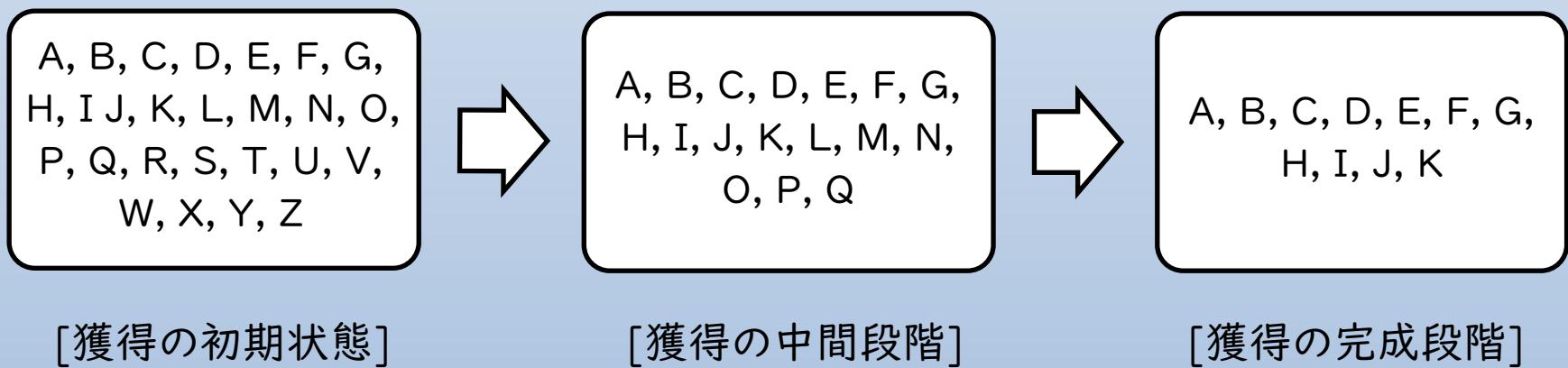


図6. 音の識別能力仮説2

仮説1と仮説2、
どちらが実際の
習得過程として
妥当性のあるもの？



pixta.jp - 18566298

仮説2が正しいならば、



日本語を母語とする私たちでも、
生まれた当初は、たとえば
日本語にはない/l/と/r/の
区別ができるでいることになる

これは本当か？

赤ちゃんの音素識別能力を調査する実験研究

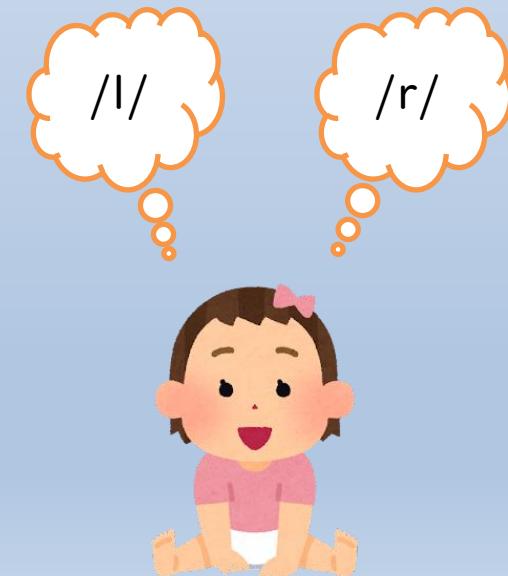


1980年代以降、
乳幼児の音素識別能力を調査する
実験研究が数多く行われてきた



【結論】

- ◆ 日本語母語話者でも、/l/と/r/の区別ができるていた時期がある
- ◆ 仮説2が正しいようだ
- ◆ 区別できるのは生後10か月ぐらいまで





いったん区別ができるなくなってしまった音の区別は、「永遠に」できなくなつたまま？

pixta.jp ~ 18566298

- 成人となってからでもそれなりの努力をすれば、再び区別ができるようになる
- イントネーションなどの超分節音素 (suprasegmental phoneme) はなかなか習得困難
- 少なくとも、個別音素の識別は思春期を過ぎてからでもかなり可能



- 1歳になる頃:一旦は、「脳内の押し入れの中」にしまい込まれた「母語では使用されない音素の識別能力」⇒その識別を再び適応量聞く状況におかれると、当該音素の区別を探すために頭の押し入れの中をごちゃごちゃと探すようになる
- その音素の区別を見つけると、再び音の違いが分かるようになる
- 年齢が若い頃に音素の識別を再び聞き始めた場合⇒押し入れの入口のそばに、その音素の識別能力が置いてある
- 年齢が上がれば上がるほど⇒その区別を捨ててはいないけれども、探すのにより時間がかかるようになる



- 小学校の英語教育では、英語の音声をできるだけたくさん聞かせることがよい
- 特に、1つ1つの音素の区別もさることながら、より習得の難しい文全体のイントネーション（抑揚）に慣れ親しませることは、とても有意義



- 毎回の授業で必ず音声を聞かせ、自分勝手に発音するのではなく、聞こえたままを真似させ、発音させることを実践するべき
- リスニングしていても、全然真似をしようとしない学習者もいるので注意が必要



母語獲得のまとめ

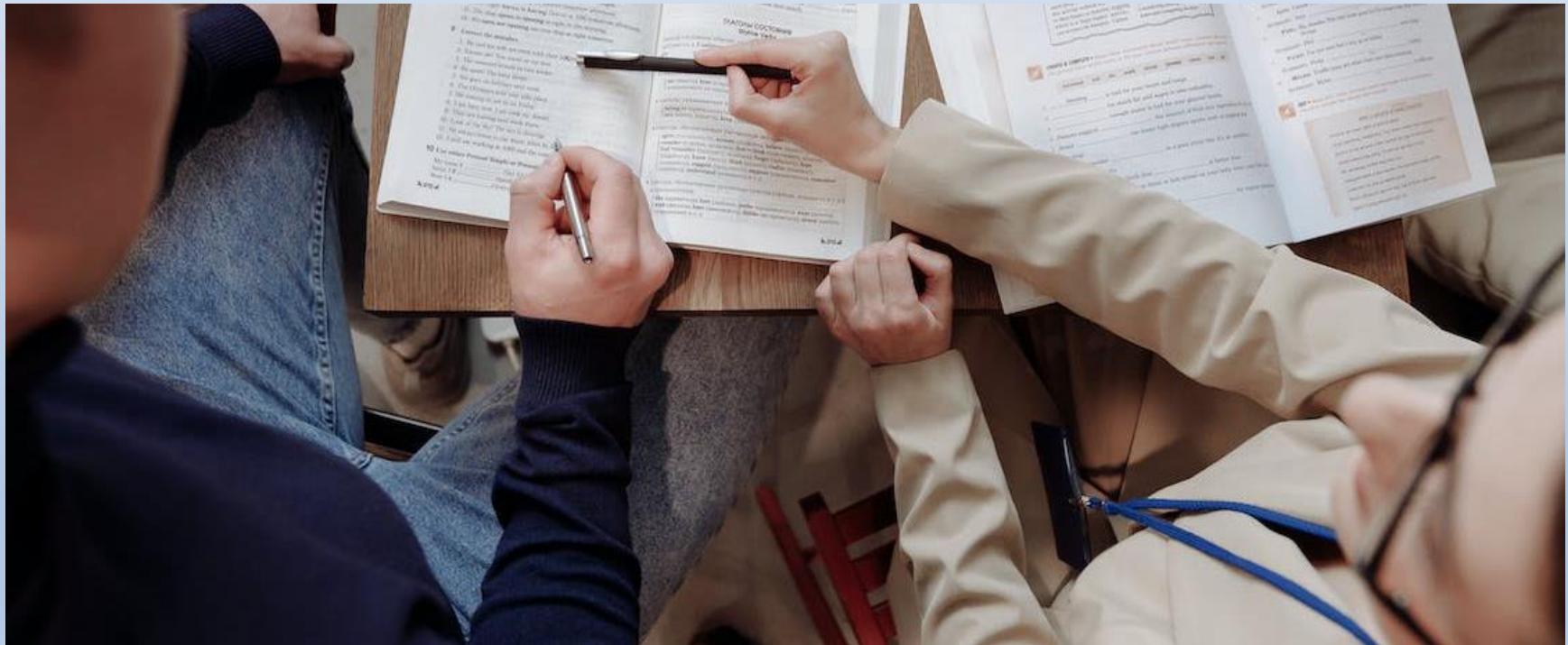
どこで育とうとも、幼児は親のことばを真似するのではなく、
遺伝的に備わった言語を獲得する能力を使用しながら、
入力される言語インプットを基に、
非常に規則的にことば（文法）を獲得していく

音声の識別能力

私たちは人間言語で使用する、
あらゆる音の区別ができる状態で生まれてきて、
たくさんの音声の中から必要なものだけを**選択**していく

∴ 取りこぼしは起こらない

3. 第二言語の習得概要



第二言語習得の4つの特徴

(9) 第二言語習得における特徴

- a. ある項目が習得できるまでの発達過程がある
- b. 学習項目間に習得困難度が存在する
- c. 学習者の母語の特性から影響を受ける
- d. 最終到達度において個人差が顕著である

a. ある項目が習得できるまでの発達過程がある

- wh疑問文の習得⇒一気に適切な構造ができるようになるわけではなく、**発達の段階**がある
- 第二言語習得の場合、**母語からの転移**などの要因が微妙に発達過程に影響を与えてくるため、母語獲得の際の発達過程とまったく同じようにはならない
- 異なる母語を持つ学習者間(例:スペイン人と日本人)で、**発達の仕方が若干異なる**
- 母語からの影響などを受けて、**発達の第1段階にいる時間が長い場合**や、とても**短い場合がある**
- 同じ母語を持つ第二言語学習者間(例:日本語話者同士)では、きわめて類似した**発達過程**をたどる

JLEsのwh疑問文の発達過程

表1. JLEsのwh疑問文(一般動詞)発達過程

発達段階1:DO挿入はできていないが、wh語を文頭に移動することができる。

例: *What you eat? (\Rightarrow What do you eat?)

例: *Where Tom? (\Rightarrow What does Tom live?)

発達段階2:be動詞を使用するなど、適切な形でない場合もあるが、助動詞を挿入できる。

例: What do you like?

例: *What are you eat? (\Rightarrow What do you eat?)

発達段階3:DOの時制はしばしば間違えるが、be動詞はほぼ使用しなくなる。

例: *What do you eat last night? (\Rightarrow What did you eat last night?)

例: *Who do you meet yesterday? (\Rightarrow who did you meet yesterday?)

発達段階4:doesをまだ十分には使用できないが、didはほぼ間違わないように使用できる。

例: Who did you meet yesterday?

例: *Where do your brother live? (\Rightarrow Where does your brother live?)

JLEsのwh疑問文の発達過程

表I. JLEsのwh疑問文(一般動詞)発達過程

発達段階5:三单現doesもほぼ間違ないように使用できるようになる。

例:Where does Mary live?

発達段階6:主語wh疑問文以外のwh疑問文をほぼ適切に産出できる。

例:When did Mary come?

例:Where does your brother live?

例:*What did make Nancy happy? (⇒ What made Nancy happy?)

例:*Who did you make this spaghetti? (⇒ Who made this spaghetti?)

発達段階7:主語who疑問文を適切に産出できるようになる。

例:Who made this spaghetti?

発達段階8(最終段階):主語what疑問文も適切な構造で産出できるようになる

例:What made Nancy happy?

b. 項目別習得困難度順序が存在する

- 教科書には学習すべき文法事項が順番に配列されている
- 教師はその順番に沿って文法を教えて行く
- 学習者⇒「教科書に配列されている順番で、つまり、教えられる順番で、文法項目を一つずつ覚えて行くわけではない」
- 第二言語習得にも覚えて行く順番がある



習得していく順番があるのなら、その順番に教科書の文法も配列した方が良いのでは？



- そのような配慮をすると教科書が上手く作れない
- 小学校、中学校で教える基本的文法項目
⇒ 習得の難易度が極めて高いものがいくつもある
- 例：冠詞、名詞の単数形・複数形、時制など
 - ➥ JLEsにとって習得困難な項目
- こういった項目を後回しにして教えることは…
⇒ 教科書を体系的に作成できない
⇒ だけでなく、コミュニケーション能力を高めようとする
日本語教育のためににもならない
 - ◆ 難しいからと言って後回しにする、教えないようにする、という考え方間違っている
 - ◆ 基本的文法項目だからこそ早めに教えて、慣れていってもらうべき
 - ◆ 完全に習得できる、できないは別の問題

(10) JLEsの習得困難度順序

ING ⇒ IRP ⇒ REP ⇒ 3PS (易 ⇒ 難)

- (11) a. John plays table tennis every day.
b. *John sometimes play table tennis.

c. 学習者の母語の特性から影響を受ける

(12) 日本語からの転移だと思われる誤り

- a. *I went to bookstore yesterday. (⇒ a/the bookstore)
- b. *I ate two banana this morning. (⇒ two bananas)
- c. *My high school's club's captain's name was Kenji Yoshioka.
(⇒ A name of the captain in my club at high school was Kenji Yoshioka.)
- d. *My family is five people. (⇒ We have five people in our family.)
- e. *John's nose is high. (⇒ John has a long nose.)
- f. *I was blown off my hat by the wind.
(⇒ I had my hat blown off by the wind.)
- g. *We went swimming to the river. (⇒ in the river)
- h. ??I think it will not rain tomorrow. (⇒ I don't think it will rain tomorrow.)



ある表現したい内容への
適格な英語(第二言語)
での表現が思い浮かばず、
そのため、その内容を表現
できる母語での言い方に
頼ってしまう



d. 最終到達度において個人差が顕著である

学習者の個人差を考える際に第二言語習得における

- 「臨界期仮説 (Critical Period Hypothesis, CPH)」
 - 「最終到達度 (ultimate attainment)」
- の問題についても考えていく

(13)

- a. 第二言語学習者は学習する言語をどこまで発達させることができるのか？
- b. 母語話者と変わらぬレベルにまで第二言語を発達させることができるのか？
- c. 教室環境での英語学習の習熟度の目標はどこに定めればよいのか？

最終到達度

- ◆ 第二言語における**最終到達度**: 学習者が長い学習経験の末に身につける第二言語の習熟度のこと

母語獲得の場合

- 最終到達度は一律
- 少なくとも文法の核となる項目の獲得と音声の獲得に関しては、全員が早々と最終ゴールに到達する

第二言語習得の場合

- 学習者の多くが当該言語の母語話者並みのレベルにまで到達しない
- 最終到達度はそれぞれの学習者によって異なる
- 日本のような教室環境で英語を学習する場合→学習開始年齢、学習時間、教科書などが同じであった学習者間であっても、数年後にはかなり高いレベルに到達する学習者とそうでない学習者が出てくる

Q:同じ学習条件で英語を学習し始めたのに、
数年たつとなぜ習熟度に差が出てきてしまうのでしょうか。



研究結果

当該言語の**母語話者と同程度**の言語能力を身につけられる条件
 ⇒その言語が日常話されている国への**到着年齢**が唯一絶対的な要因

- ✓ 少なくとも**7歳**ごろまでに彼の地に到着(移民)
- ✓ **学校**に通いながら日常生活
- ✓ ある一定の**年数**を経過
 ⇒ほぼ全員が英語母語話者と同程度の成績

- 到着年齢が高くなるにつれて、母語話者と同等レベルとみなされる人の割合が減少
- 英語の話される国への到着年齢の高い人たちの中では、テストの得点の分布が非常に幅広くなる⇒**個人差が顕著**になる

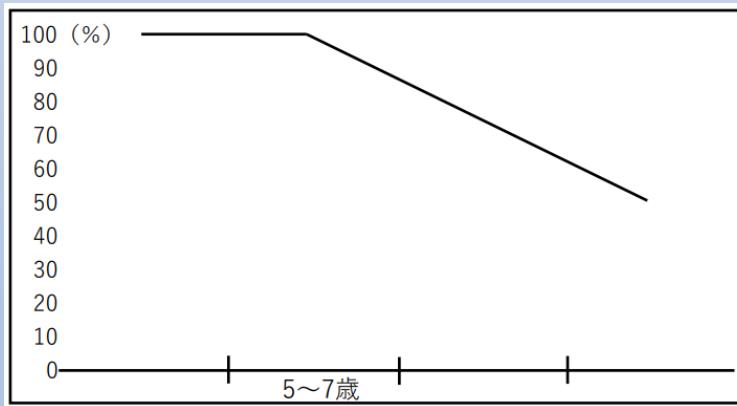


図8. 到着年齢と母語話者並みのレベル到達者のモデル

Q: 第二言語が話されている国や地域への到着年齢、つまり現地到着からの学習開始年齢、が高くなると、成人の第二言語学習者ではなぜ最終到達度において個人差が著しくなるのでしょうか



学習者本人が好むと好まざるとにかくわらず、そして、意識的であれ無意識的であれ、成人が第二言語を習得していく際には「本来の言語能力(UG)以外の個人の持つ能力や要因」がさまざまに影響を与えてくるため、個人差が大きくなるのではないか

- (14) 本来の言語能力以外で学習者にさまざまに影響を与えそうな要因
- a. 学習者の母語の知識や構造からの影響
 - b. それまでに学習者の身につけてきた一般認知能力や常識的なものの見方や考え方
 - c. 運動能力、聴覚視覚能力、そして記憶能力などの衰え

2. 教室での第二言語習得と臨界期仮説・最終到達度

- 日本で英語を学習する場合、臨界期についての詳細な実験結果などを全く気にする必要はない
- 日本での教室で何歳から英語を学習しようとも、「母語話者並みの能力」を身につけることは難しい
- 第二言語環境での実験データなど気にすることなく、私たちは「英語の上級者」となるよう、努力を続ければよい
- 頑張れば、まわりから羨ましがられるぐらいの「英語（外国語）上級者」になれることも不可能ではない
- 日本の教室での英語教育の目的は、母語話者と肩を並べるほどの英語能力を身につけることではない
- 母語話者並みの英語能力を身につける環境にいなくても、がっかりすることはない



3. 第二言語での語彙の習得

- 教室場面において、第二言語の語彙を覚えるその覚え方
⇒ 基本的に母語の語彙を獲得する仕方とは異なる
- 教室での第二言語習得で新出単語としてある単語を学習する場合、大抵の語彙でその語の表す意味を母語の語彙を通して既に知っている
- 第二言語であらためて意味をゼロから覚えて行く場合は少ない
- 中学校での新出英単語 = 1600語～1800語(2021年度～)
⇒ 日本語での意味を知らない中学生はほぼいない



英単語学習においてJLEsがやらなくてはいけないことは、
当該単語の意味そのものを覚えることではなく、

- その英単語は日本語ではどの語彙に相当するのかということを把握すること
- その語彙の綴りと発音を学習すること

「この英単語は難しい単語だ」

➡ 「意味」や「概念」に疎い

英語	日本語
insight	洞察力

□ 日本語(母語)での語彙量が少ない生徒

- ⇒ 学年が上がるにつれて英単語を覚えていくときに苦労する
- ⇒ 母語での語彙の量を同時に増やしていくことも必要となる

□ 抽象的な概念を表す語彙は、

その意味を母語でまず理解しておく必要がある

語彙を「知っている」

- ✓ 見たこと、聞いたことがある
 - ✓ 何となく意味は分かる
 - ✓ はっきりと意味は分かるが、自分ではめったに使用しない
 - ✓ 意味も分かるし普段よく使用している
- ⇒ さまざまな語彙の理解度レベルがある

母語の語彙の場合

- その人が「使用できている語」であれば、発音や文法などを誤って使用していることは(小さな幼児を除けば)あまりない

第二言語の場合

- 状況が異なる
- 発話していても誤って使用している場合もある

(15) 学習指導要領(外国語)での語彙量

2020年度以降、順次全面実施の学習指導要領:

小学校600~700語

中学校1600~1800語、

高等学校1800~2500語

合計4000語~5000語

学習すべき語彙量が
増えることに
基本的に賛成



- ✓ 語彙量の多い人の表現力は豊か
- ✓ 第二言語の語彙をたくさん知っていれば表現の幅も広がる
- ✓ 豊富な語彙量
 - ⇒文章の意味を理解し味わうこと
 - ⇒他の3技能にも役立つ

Q:一般的な日本の高校生、大学生、そして成人は
一体どのくらい「日本語(母語)の語彙」を身に
つけているのでしょうか



平均的には3万語から4万語ぐらいの
日本語の語彙量(受容語彙)

英語の語彙
5000語
※日本語の6分の1

- 学習すべき英単語の数が増えたことは事実
 - 日本語でも英語でも、他のどの言語を学習する際でも、
たくさん単語を知っている方が便利なことに変わりない
 - 文法の学習の場合と同様、語彙の学習も、語彙 자체を
たくさん覚えることが最終目的ではない
 - あくまで、4技能の習得の際の土台とすべきもの
- ⇒英単語学習に積極的に取り組むためにも、今後はどのような
語彙の学習方法がより効果的であるのかを、今まで以上に
積極的に考えていくことが日本の英語教育のためになる



4. 最後に



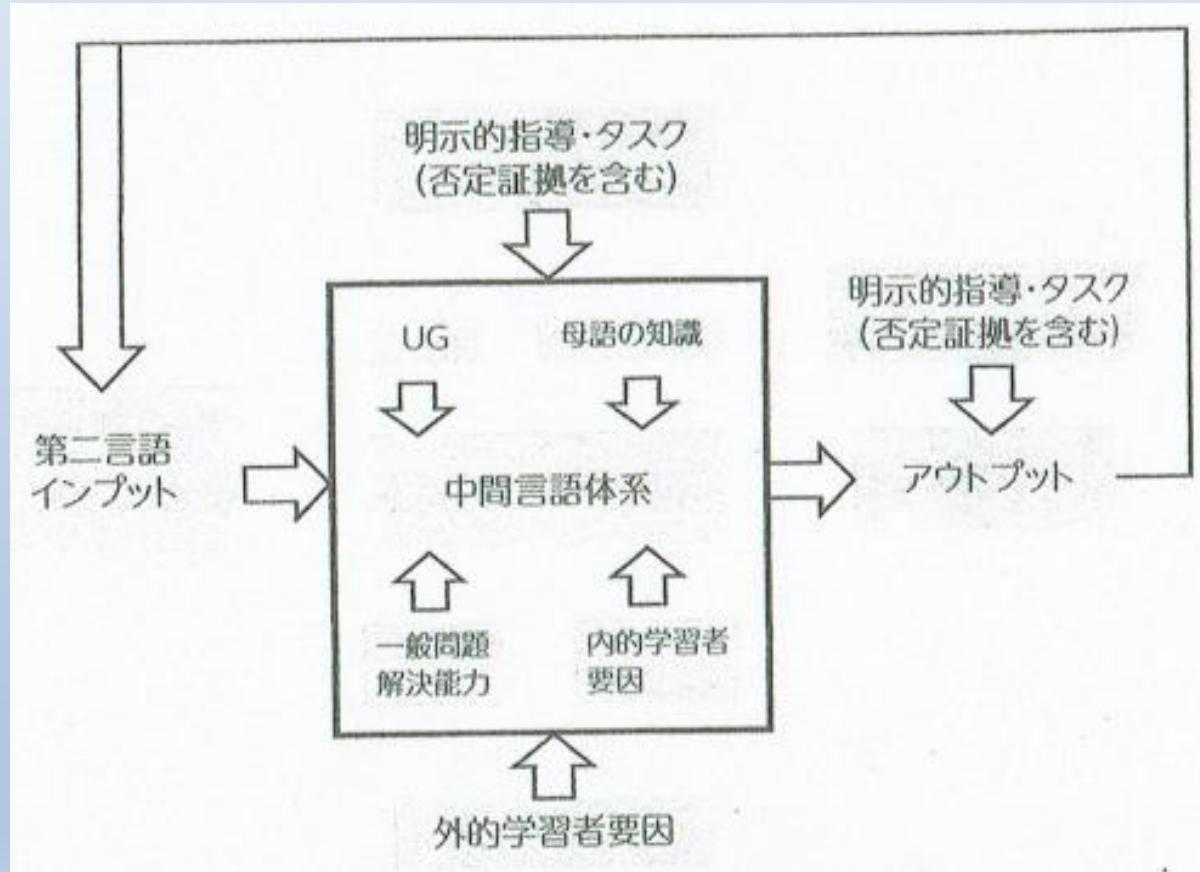


図9 第二言語の習得モデル

ご清聴
ありがとうございました。
速足ですいません。

白畠知彦(静岡大学)

shirahata.tomohiko@shizuoka.ac.jp



謝辞

本スライドを作成するにあたり、箱崎雄子先生（大阪教育大学）には全面的にご協力いただきました。

また、三重地区の中川右也先生には日頃より大変お世話になっております。今回はご迷惑もおかけいたしました。

お二人に感謝申し上げます。